

## 研究プロジェクト一覧

\* 京都大学こころの未来研究センターはセンターと略称

### ■能動的注意に関わる脳内神経メカニズムの解明

人が周囲のできごとと関係なく、能動的に何かに注意を向け続けるときに、どのようなこころの働きや時間的変化が生じているのか、「こころの窓」とも評される目の動き（眼球運動）を手がかりに探る。これにより、こころの状態や動きを作り出す基礎的なメカニズムを考察する。  
研究代表者 船橋新太郎（センター教授）  
連携研究員 福山秀直（京都大学大学院医学研究科教授）、澤本伸克（同助教）、齋木潤（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、山本洋紀（同助教）、小川正（京都大学大学院医学研究科講師）  
センター参加教員 番浩志（センター助教）

### ■依存症に関する総合的研究

携帯電話依存、ゲーム依存、ギャンブル依存など、薬物依存とは異なる新たな依存症に対し、その生起メカニズムや治療・支援法の開発などの基礎的・臨床的研究と、防止と改善のための対策立案が急務である。特にゲームやギャンブルへの依存症の生物学的要因に注目し、「はまるこころ」の仕組みにかんする基礎的研究を実施する。  
研究代表者 船橋新太郎（センター教授）  
連携研究員 福山秀直（京都大学大学院医学研究科教授）、谷岡一郎（大阪商業大学学長・教授）、勝見幸則（大阪商業大学アミューズメント産業研究所主任研究員）  
センター参加教員 番浩志（センター助教）

### ■発達障害における心理療法的アプローチ

発達障害については、近年において薬物療法と訓練教育が中心となっているが、心理療法的アプローチも成果をあげていると考えられる。事例検討会から、心理療法的アプローチのエッセンスを抽出することで、倫理的問題や個別性の限界を越えて、心理療法から見えてくる発達障害へのアプローチを検討し、専門家や一般にフィードバックする。  
研究代表者 河合俊雄（センター教授）  
連携研究員 田中康裕（京都大学大学院教育学研究科准教授）、片畑真由美（同助教）、竹中菜苗（同）、十一元三（京都大学大学院医学研究科教授）、黒川嘉子（佛教大学講師）  
共同研究員 畑中千紘（センター特定研究員）

### ■青年期の社会的適応と文化

青年期の「ひきこもり」などの不適応について、国際共同研究を含む対人関係・自己認知および感情についての研究から現代日本の青年のかかえる問題を探る。それを元に適応的なこころの働きを促進する介入アプローチを探索し、教育現場や社会集団へのフィードバックを行う。  
研究代表者 内田由紀子（センター助教）  
連携研究員 北山忍（ミシガン大学教授）  
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

### ■教育現場の現状把握と支援に関する研究

中学校の教員は、礼儀作法やいのちの尊重、自尊心といった、従来は家庭や地域社会が担ってきたこころの教育を求められることも少なくない。教員が抱える問題や悩みを調査し把握する。これを通じて、現場のニーズに応じた教員のこころの支援プログラムを開発する。  
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）  
共同研究員 有田恵（同特定研究員）、山本佳世子（京都大学大学院人間・環境学研究科大学院生）、井藤美由紀（同）、大崎真奈美（同）、林貴啓（立命館大学非常勤講師）

### ■要介護者の主介護者におけるバーンアウトとその関連要因

高齢者が人口の2割を超える社会において、介護者のかかえる問題の

把握は不可欠である。特に主介護者がバーンアウトする要因を明らかにすることを通じ、介護する側、介護される側のこころにとってより良い介護をもたらす支援の形を探る。  
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）  
連携研究員 木下彩栄（京都大学大学院医学研究科教授）、久保田正和（同助教）  
共同研究員 日吉（谷口）和子（同大学院生）

### ■発達障害の認知・感情特性と療育的関わり

学習障害児や発達障害児の抱える問題に対して、学習の困難さをもたらす認知機能と脳機構の関連を基礎研究により明らかにする。その上で基礎研究のフィードバックを含みつつ、個々の学習障害児・発達障害児のこころの特徴に応じた療育プログラムを開発・実施する。  
研究代表者 久保（川合）南海子（センター助教）  
連携研究員 正高信男（京都大学霊長類研究所教授）  
共同研究員 伊藤祐康（京都大学大学院理学研究科大学院生）、福島美和（同）  
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

### ■共感的対話の相互作用性

心理臨床のカウンセリング対話に焦点をあて、優れた聴き手のもつ特性を明らかにすることにより「対話すること」が人間のこころに持つ意味を実証的に明らかにする。これにより、さまざまな人間関係におけるコミュニケーション不全を回避し、「深い対話」を促進する手がかりを得ることを目指す。  
研究代表者 吉川左紀子（センター教授）  
連携研究員 桑原知子（京都大学大学院教育学研究科教授）、渡部幹（早稲田大学准教授）、小森政嗣（大阪電気通信大学准教授）  
共同研究員 長岡千賀（センター学振PD）

### ■現代における自己意識・他者意識の研究

日本人のこころが、日本古来の自己意識・他者意識から、明治期以後の急速な近代意識の確立を経て、現代、いかなるものに変化しつつあるのか、心理療法の事例、文学・芸術作品の検討、さらには思想的なアプローチを含めて研究し、日本古来のこころが、未来にたいしていかなる可能性を開くのか検討する。  
研究代表者 河合俊雄（センター教授）  
連携研究員 矢野智司（京都大学大学院教育学研究科教授）、西平直（同）、田中康裕（同准教授）、吉岡洋（京都大学大学院文学研究科教授）、赤坂憲雄（東北芸術工科大学教授）、岩宮恵子（島根大学教授）、猪股剛（群馬大学准教授）  
共同研究員 畑中千紘（センター特定研究員）

### ■ソーシャル・ネットワークの機能グループ内の「思いやり」の性質

対人ネットワークのしくみについての調査を通して、人と人とのつながりがうまく機能する場面はどういったものであるのか、相手の気持ちを慮る「思いやり」がポジティブに機能している集団はどのようなものなのかを探る。この調査により、コミュニケーションと感情に関わる様々な問題についてのより詳細な理解が進むと考えられる。  
研究代表者 内田由紀子（センター助教）  
連携研究員 Vinai Norasakkunkit（ミネソタ州立大学准教授）  
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

### ■がん患者のSOC（生きがい）調査

がん患者は、病気だけでなく、その治療からも身体的、心理的、社会的変化というストレスを受ける。そうしたストレス状況への対応において、個々の患者のこころの在りようがいかなる影響力を持つか、首尾

一貫感覚（Sense of Coherence）を測定することにより実証的に検討する。  
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）  
連携研究員 林優子（京都大学大学院医学研究科教授）、赤澤千春（同准教授）、高橋美和（同助教）  
共同研究員 中嶋文子（京都大学病院看護部看護師長）、高野満希子（同）、竹下麻美（同）

### ■甲状腺疾患における心と体の関係の研究

心身症の1つである甲状腺疾患について、患者のこころを統計的研究とカウンセリングを伴う事例研究の2つの側面から理解し、さらには心理療法と身体的治療の関連を探る。これにより、こころと体の関係が心身の不調に与える影響を探る。  
研究代表者 河合俊雄（センター教授）  
連携研究員 野間俊一（京都大学大学院医学研究科助教）、田中美香（隈病院臨床心理士）、金山由美（京都文教大学准教授）、桑原晴子（同助教）  
共同研究員 梅村高太郎（京都大学大学院教育学研究科大学院生）

### ■京都における癒しの伝統とリソース

京都におけるお寺・神社・祭りなどは、多くの人がこころの安定や癒しを求める場や儀式となっている。認知科学、臨床心理学、宗教学などの多角的な視点から、それらが持つこころを癒す仕掛けを解明し、さらには時代を超えて使える「臨床の知」として紹介していく。  
研究代表者 河合俊雄（センター教授）  
連携研究員 渡邊克巳（東京大学准教授）、駿地真由美（追手門学院大学准教授）  
センター参加教員 鎌田東二（センター教授）、吉川左紀子（同）

### ■こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究

人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、宗教・哲学・芸術・思想などの側面から思想的考察を加えつつ、霊長類とヒトのこころについての連関と差異について、またこころ観の文化差や地域差や時代差や精神疾患との関係についても考察する。「こころ観の研究」を通して、さまざまなこころ研究の思想的前提を確認し、共通の土俵作りや、それぞれの研究者のよって立つ位置の自覚を促す。  
研究代表者 鎌田東二（センター教授）  
連携研究員 山極寿一（京都大学理学研究科教授）、松本直子（岡山大学准教授）、湯本貴和（総合地球環境学研究所教授）、矢野智司（京都大学教育学研究科教授）、棚次正和（京都府立医科大学教授）、氣多雅子（京都大学大学院文学研究科教授）、末木文美士（東京大学教授）、黒住真（東京大学教授）、西平直（京都大学大学院教育学研究科教授）、上野誠（奈良大学教授）、高橋義人（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、入来篤史（理化学研究所グループリーダー）、加藤忠史（同）  
共同研究員 大石高典（センター特定研究員）、石井匠（京都造形芸術大学非常勤講師）、上本雄一郎（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学）  
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）、河合俊雄（同）、番浩志（同助教）、平石界（同）、内田由紀子（同）

### ■こころとモノをつなぐワザの研究

「こころ」に迫る視点として、こころとモノをつなぐ媒介者としての「ワザ」を考察する。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法群で、呼吸法や瞑想法などの身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術、諸種の儀礼や学芸やライフスタイルを含むが、そのワザの力と諸相を探究する。  
研究代表者 鎌田東二（センター教授）  
連携研究員 梅原賢一郎（京都造形芸術大学教授）、岡田美智男（豊橋技術科学大学教授）、藤井秀雪（京都造形芸術大学教授）、上林壮一郎（同准教授）、大西宏志（同）、内田樹（神戸女学院大学教授）、山本ひろ子（和光大学教授）、菅原和孝（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、小林昌廣（情報科学芸術大学院大学教授）、井上ウィマラ（高野山大学准教授）

共同研究員 大石高典（センター特定研究員）、松生歩（京都造形芸術大学教授）、関本徹生（同）、松井利夫（同）、石井匠（同非常勤講師）、須藤義人（沖縄大学専任講師）、大重潤一郎（NPO法人沖縄映像文化研究所理事長）、近藤高弘（造形美術家）、佐久間庸和（北陸大学客員教授）、上田洋平（滋賀県立大学地域づくり調査研究センター研究員）

### ■Webによるこころの研究ニュースの発信

本プロジェクトでは、こころに関する研究を紹介する記事をWeb上にブログ形式で公開し、科学的な「こころ」の研究の成果を、広く一般に還元することを目指す。「こころ」について、何が明らかとなっており、何が明らかでないのかということの正確な知識の普及は、人々が現在のありようを理解し、未来を考える上での基盤となるだろう。  
研究代表者 平石界（センター助教）  
連携研究員 田村亮（埼玉学園大学専任講師）  
共同研究員 池田功毅（東京大学大学院総合文化研究科大学院）

### 連携機関とのプロジェクト

### ■こころの未来育み事業

こころの未来研究センターと京都府の協働により、地域と連携した研究の成果等を、セミナーの開催や府施策への活用等によって、若者をはじめ幅広い府民に還元し、豊かなこころを育む機会を提供する。  
委託者 京都府府民労働部  
受託代表者 吉川左紀子（センター教授）

### 一般公募型連携プロジェクト

### ■<モノ>の表情・眼力の実証研究

仏像などの<モノ>は心理的・宗教的・文化的に人々をつなぐ力を持つ。そうした<モノ>が人のこころに対して持つ力がどこから来るものなのか、実際の人間の表情・視線・姿勢と、<モノ>に転写されたそれらの関連を、実験心理学や脳科学の手法を用いて探ることにより、実証的に明らかにする。  
研究代表者 渡邊克巳（東京大学准教授）  
センター受入教員 吉川左紀子（センター教授）

### ■NEET in Japan culture:Examining the Origins and Structures of Attitudes and Malleability of Self

学生、若手の就労者、「ニート」と呼ばれる人々を対象に、自己の可塑性、明示的、潜在的自己意識についての国際共同研究を含む調査を行う。それを元に、文化・社会構造とこころの働きとの関わりを重層的に精査し、目標や行動意欲を失った人々にとって、日本文化の肯定的側面が機能するためにはどのようにすればよいか、その対処法を探る。  
研究代表者 Vinai Norasakkunkit（ミネソタ州立大学准教授）  
センター受入教員 内田由紀子（センター助教）

### ■「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究 -双生児法による

社会的生物であるヒトは、他者とのかわりにおいて働く「社会的こころ」を進化的・文化的に獲得してきた。そこにみられる個人差は、翻って社会の多様性にも繋がっている。「社会的こころ」の形成過程とその多様性もつ機能を、進化心理学と行動遺伝学の理論に基づいて、双生児法を用いて実証的に明らかにする。  
研究代表者 安藤寿康（慶應義塾大学教授）  
共同研究員 敷島千鶴（慶應義塾大学先導研究センター研究員）  
センター受入教員 平石界（センター助教）

研究プロジェクト

# 能動的注意に関わる 脳内神経メカニズムの解明

船橋新太郎 (こころの未来研究センター教授)  
Shintaro Funahashi

## 本研究プロジェクトの ねらい

私たちは突然現れた異様なものに反射的に注意を向けたり、周囲の出来事を無視してあるものに注意を集中し続けたりすることがある。前者は受動的注意、後者は能動的注意と表現される。注意がどこに向けられ、それが時間とともにどのように変化するかは、その時のこの動きや状態と密接に関わっている。一方、「目はこの窓」と表現されるように、視線によって注意の向きを知ることができる。そこで、視線の動きを指標に、注意が向けられる対象を選択するしくみ、対象への注意を維持するしくみ、目標刺激と妨害刺激を区別するしくみなどを明らかにすることにより、こころの動きを考察する。

## 研究の目的

注意を向けている対象を知る代表

的な指標として、視線の向きが用いられる。視線の向きや動きの制御に関わる部位としていくつかの脳部位が知られているが、中でも前頭葉にある前頭眼野は眼球運動の発現や制御に中心的な役割を果たしている部位である。また、この部位の損傷により注意の障害が現れることもよく知られている。そこで、前頭眼野の働きをもとに、能動的注意のしくみを検討する。

動物実験により、前頭眼野内に視野のトポグラフィックな表現のあること、また、眼球運動の方向や大きさに関するトポグラフィックな表現のあることが明らかになっている(図1・2)。しかし、ヒトの脳における前頭眼野の正確な位置の決定や、動物実験で観察されている視野や眼球運動パラメータのトポグラフィックな表現がヒトの前頭眼野にも存在す

るかどうかの検討はなされていない。そこで、ヒトの脳での前頭眼野の正確な位置決定方法の確立と、ヒトの前頭眼野においても視野や眼球運動パラメータに関するトポグラフィックな表現があるかどうかを、fMRIによる脳機能イメージング研究により検討した。

## 方法

実験協力者にはMRI装置の中で画面中央の注視点から周辺の目標位置へ向かう眼球運動を行ってもらい、その間の脳活動をfMRIにより計測した。目標位置を時計回りまたは反時計回りに30°ずつ移動させ、目標位置へ眼球運動を行う課題と、注視点を見続けるだけの課題を交互に行ってもらった。前頭眼野における眼球運動方向のトポグラ

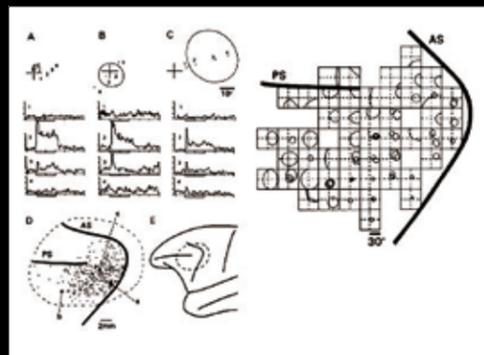


図1 前頭眼野に見られる視覚受容野のトポグラフィー (Suzuki and Azuma, 1983)

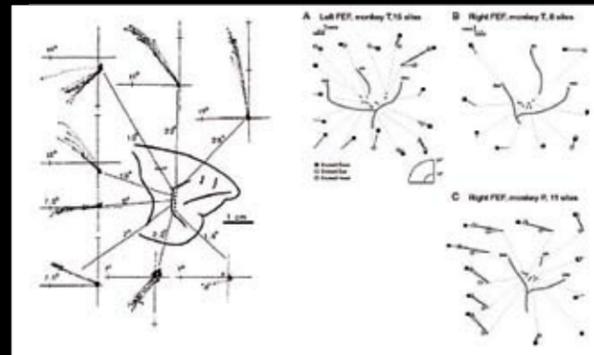


図2 前頭眼野に見られる眼球運動方向のトポグラフィー (Bruce et al., 1985)

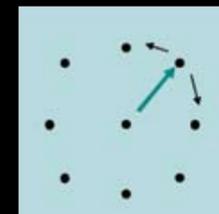


図3 眼球運動課題の様子

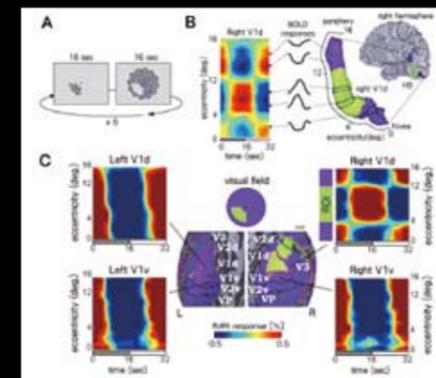


図4 位相符号化解析法の例

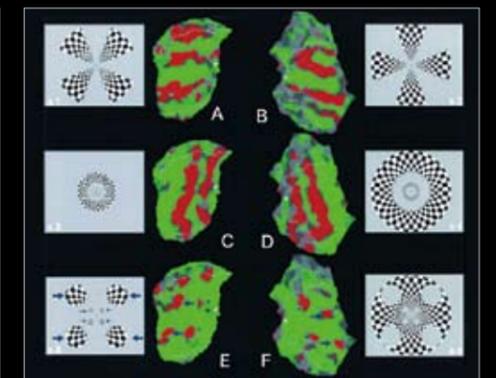


図5 位相符号化法で得られるトポグラフィックマップの例

フィックな表現の有無を検出するため、得られたfMRI信号は「位相符号化解析法」を用いて解析した(図3-5)。また、前頭眼野の位置を他の既知の領域との相対的な位置関係を使って決定する目的で、注視点から周辺の目標位置へ向かう眼球運動をする課題、注視点を見続けるだけの課題、注視点を見ながら人差し指のタッピング運動をする課題、注視点を見ながら舌を左右に動かす課題を交互に行ってもらい、この間の脳活動をfMRIにより計測した。

## 結果

眼球運動実行時には、上前頭溝と中心前溝の交点付近の皮質で顕著

な脳活動が観察された(図6)。一方、指タッピング課題実行時には前中心回のやや背側部を中心とする領域で、また舌運動時には前中心回の腹側部を中心とする領域で顕著な脳活動が観察された。異なる行動で賦活される脳領域を同一人で比較したところ、それぞれの領域間で重なりはなく、それぞれの活動中心の相対的位置関係に類似が見られ、指運動と舌運動に関与する脳部位をもとに、前頭眼野の位置を推定できることが明らかになった。

また、fMRI信号の位相符号化解析により、前頭眼野では眼球運動方向の違いに応じてシステムティックに変化することが見出された(図6)。ヒトの前頭眼野に

おいても、サルと同様に、視野や眼球運動パラメータに関するトポグラフィックな表象が存在することが明らかになった。

## 今後の目標

これらの成果を手がかりに、視野の特定の場所に呈示される刺激に対する能動的注意課題、受動的注意課題における前頭眼野の活動の比較から、注意制御に関わる前頭眼野の役割を解析し、意識的にある対象に注意をむけるしくみの解明をめざす。

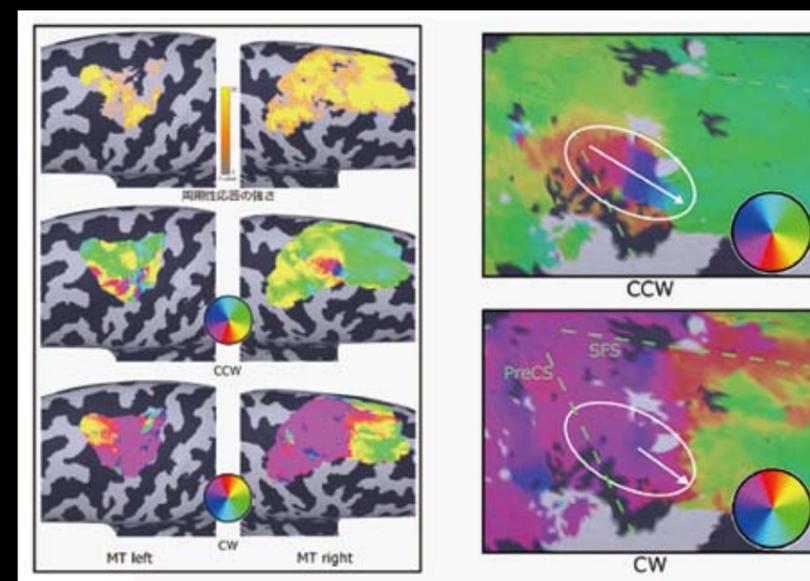


図6 左図 上:眼球運動方向の周期的な変化に対応して活動量が周期的に変化した前頭葉の領域。中:反時計回り方向に眼球運動方向を回転させた時の前頭葉の活動部位の変化の様子。下:時計回り方向に眼球運動方向を回転させた時の前頭葉の活動部位の変化の様子。いずれも右は右半球の、左は左半球の活動を示している。右図 右半球の前頭眼野で観察された眼球運動方向の違いに応じた活動部位の変化。上:反時計回りの運動時。下:時計回りの運動時。

## 研究プロジェクト

## 癌患者支援プロジェクト

## はじめに

こころの未来研究センターでは、「癌患者支援プロジェクト」を行っている。このプロジェクトは平成19年度より始動されたが、ここでは20年度からこのプロジェクトで行っている重病患者の生きがい調査、「癌患者の首尾一貫感覚 (SOC : Sense of Coherence)」調査についての研究進捗状況を紹介する。

研究プロジェクトの背景  
——実践と理論のつながり——

私は長年にわたり、末期患者の研究とカウンセリングを行ってきた。末期患者と対面していると、精神力と身体症状との深いつながりを実感し、心が身体に及ぼす影響について考えずにはいられなかった。

ここに余命を宣告された二人の末期癌患者の例を挙げてみよう。医学的見地からすると、両者の病状はほぼ同じであっても、病への向かい方 (気持ちの持ちよう) は違うのである。一人の患者は、「息子が結婚するまでは」とか、「孫が卒業するまでは」など、何がしかの目標を持っていた。末期状態にあってもこのような目標 (希望) を持つことは、結果として精神力やNK (ナチュラルキラー) 細胞の活性化を促し、医学的予測をはるかに上まわって、生を全うすることもある。もう一人の患者は、既に家族を亡くして、「もう生きる意味がない」と生への目標を失っていた。このような背景から、予後告知を死の宣言として捉え、残された時間の意味を見いだせず、予後告知から十日も経たない内に息を引き

カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授)  
Carl Becker

取ったケースもある。

これはほんの一例にすぎないが、患者の精神力が余命に影響を及ぼすくらいに、精神と身体は強いつながりを持っている。つまり、「こころ」が、病気からの回復や進行に大きな影響を及ぼしているのである。昔から、「病は気から」と言われる東洋においては、この現象はさほど驚くことでもないであろう。しかしながら、このことを科学的見地から明らかにしようとする試みが始まったのは、ごく最近のことなのである。

精神が身体に与える影響に関する科学的調査法を大きく発展させたのは、40年ほど前に革新的な博士論文を発表したアロン・アントノフスキー (1923-1994) である。彼は優れた論文や著書を数多く発表し (1987)、科学的手法 (統計学的分析) を用いて、病に罹りやすい人とそうでない人の違いを探る研究を重ねた。その結果、センス・オブ・コヒレンス (Sense of Coherence = 「首尾一貫感覚、人生観」以下SOCと略す) という理論を見出した。

病に対する精神力として、アントノフスキーは「人生における意味」を挙げた。「Salutogenesis (健康原因論)」と呼ばれるアントノフスキーの理論は、健康に有益な人生観を「コヒレントな (意味をなす) もの」と名付け、その人生観を形成する要因として次の3つを挙げた。(1) 置かれている状況を理解する能力 (Comprehensibility)、(2) 置かれている状況に対応する能力

(Manageability)、(3) 頑張る意義を見いだす能力 (Meaningfulness) である。これらの要因が強ければ強いほど、病気などに強いということが分かってきたのである。

健康原因論を発表して以来、十数年間にわたり、アントノフスキーとその支持者は主観的尺度 (言語・文化・宗教など) に偏らない科学的測定指数を用い、この理論を実証してきた。北欧をはじめとする福祉国家は、国家医療費削減という観点から、病気の治療よりも、予防に重きを置いている。それゆえ、精神と身体の関係 (= こころ!) が健康に及ぼす影響を明らかにしたアントノフスキーのSOC調査法は、過去20年間、少なくとも400件以上の医学・社会的研究論文に引用され、20万人以上の人に対して行われてきた。わが国における重症患者のケアや予防医療においても、このSOC調査は有益であろうと考えられる。

京都大学こころの未来  
研究センターにおける  
プロジェクトの試み

先ほど「こころと身体をつながり」について述べたが、筆者の感覚と同じ実感を現場の看護師たちも持っていた。京都大学附属病院では、臨床現場でのケアとケアへの情熱を持つ師長や看護師たちが定期的に夕方勉強会を行ってきた。看護師たちは、患者の精神面が病の治療に留まらず、看護においても大きな影響を



患者とのコミュニケーション

及ぼすことを経験として知っていたが、それを実証する手法を持っておらず、実践における新たなケアとケアの精神支援プログラムを確立するには至っていなかった。勉強会において筆者と共にアントノフスキーのSOC理論を勉強し、看護師たちは臨床現場での実感を科学的根拠に基づいて証明することによって、新たなケア・ケア精神支援プログラムを導入することができるのではないかと仮説を立てた。

この実践現場からの声を基に、こころの未来研究センターでは「癌患者支援プロジェクト」を立ち上げた。現在、このプロジェクトの第1段階として、「癌患者の首尾一貫感覚 (SOC)」に関する疫学研究を開始している。京都大学附属病院内で予備調査的に行われてきた調査は、第二岡本総合病院、三菱京都病院、京都南病院、康生会武田病院、武田病院、計6つの病院の協力を得、本格的な研究に着手した。

本研究の第1の目的は、癌を中心とする重病患者のSOCを調査することによって、精神面の及ぼす影響を探ることである。将来的には、その精神面を支えるための手法を検討し、患者に対する新しいケア・ケアプログラムを構成するとともに、看護師側のストレスやSOCを調査し、看護師側の支援も提言したいと

考えている。

癌の治療過程において、癌患者の多くは、手術や化学療法など身体的負担を強いられ、治療による傷跡などの身体的・社会的・精神的変化を引き受け、ライフスタイルの変容を求められる。これらはストレスを伴い、適応には時間がかかり、時に抑うつ状態などの不適応を起こすこともある。患者によって様々であるが、スムーズに適応できるように早期看護介入を行う必要がある。まず、ストレスを受ける患者の生き方やものの考え方等、個別の要素との関係を明らかにすることはその第一歩であろう。この個別の要素を分析する方法としてSOC調査を使用している。癌患者が困難な状況に適応し、社会復帰を果たすためのケアとケアを考えることがその目的の1つである。既存研究においては、身体的・社会的・精神的変化を余儀なくされ、

新たなライフスタイルの受け入れ困難な患者の解析にはストレス・コーピング理論や危機理論が用いられることが多かった。それに対して、本研究では健康生成論に基づいたSOCに着目し測定することで、患者が持っているストレス対処能力による適応状況の違いを明らかにできると考える。

癌患者の内面を測るという慎重を要する研究であるため、調査の実施にあたり、SOC調査法の理解や内容の精査、倫理委員会の承認といった手続きに長い時間を要した。病棟の激務が終わった後、夜の勉強会に参加して下さる看護師たちの研究に対する忍耐強い姿勢と情熱という強力な支援を得て、数年後には、わが国の医療に対して有益な結果が提唱できると確信している。

本調査に着手して間がないために、結果を示せる段階ではないが、調査を通じて看護師が患者と話し合う時間を増やすことによって、互いの信頼関係が深まり、治療に患者が協力的になったことを報告する看護師もいる。今後の展望としては、個々の患者や看護師に合った具体的な支援策の提言を目指し、さらに研究を重ねて深めたいと思っている。

## 追加資料

Antonovsky, Aaron. *Unraveling the Mystery of Health*. San Francisco: Jossey Bass, 1987.  
C. ベッカー著「SOCの現状とスピリチュアル教育の意味」『全人的医療』(浜松医科大学) 8巻、1号、2007年12月、23-52頁。



研究会

教員が担当する説明会

## 研究プロジェクト

## 京都における癒しの伝統とリソース

## 研究のきっかけと目的

この研究のきっかけは、心理療法において、お寺や神社を訪れたり、祭りに参加したりした体験がしばしば報告され、それが治療において意味があることが多いと感じられたことである。これには二重の問いかけがあると考えられる。1つには、ここを内面としてとらえる心理療法のこころ観の狭さである。これについては、こころ観の問題として追求していく必要がある。もう1つは、京都におけるお寺・神社・祭りなどは、単なる観光や歴史研究の対象ではなく、今なお多くの人々が心の安定や癒しを求めていく際の重要な仕掛けや儀式を提供していると考えられることである。ただしそれには、現代のわれわれのこころに響きにくくなっている、お寺や神社の、発掘や再発見の作業が必要となろう。

この研究の目的は、主に後者の問題意識にかかわっていて、認知科学、臨床心理学、宗教学などの多角的な視点から京都におけるあまり知られていないお寺・神社・祭りなどに見られる心の癒しの仕掛けを解明すると同時に、それをいわば「臨床の知」として、今なお使えるリソースとして紹介していくことである。

## 研究の方法と対象

このプロジェクトにおいては、社会学・認知科学などからの基礎的な研究も予定されているが、今までのところは認知科学、臨床心理学、宗教学などからなるチームが自分で対

河合俊雄 (こころの未来研究センター教授)  
Toshio Kawai

象となる癒しの仕掛けを主体的に体験し、自分の専門分野から考察するという方法で、7回のフィールドワークを行った。また、閻魔さんや不動明王の眼力に関する認知的研究も計画はされている。

これまで訪れた場所をあげておく。

1. 狸谷山不動院
2. 釘抜地蔵、千本ゑんま堂、船岡山
3. 六道の辻(六道珍皇寺、西福寺、六波羅蜜寺、建仁寺)
4. 嵯峨野(化野念仏寺)
5. 伏見稲荷大社
6. 赤山禅院
7. 御蔭神社、御生山

また、このプロジェクトに関連するフィールドワークとして、8月末には、バリ島における研修・フィールドワー

著作権者・所蔵者の権利の保護のため  
画像は掲載できません

釘抜地蔵に奉納されている絵馬  
(3点とも撮影:和田久士)

著作権者・所蔵者の権利の保護のため  
画像は掲載できません

狸谷山不動院本殿

クを行い、日本よりももっと宗教儀式が実際の生活に根付いている文化を研究した。

これまでの、フィールドワークの成果は、河合俊雄・鎌田東二『京都の「癒しの道」案内』朝日新書、として、11月に刊行される予定になっている。

## フィールドワークの成果

フィールドワークの成果の例として、3つほどあげておきたい。

1. 第1回のフィールドワークは、詩仙堂の奥にある狸谷山を中心とした。特に詩仙堂から上へ上へと、奥へ奥へと進んでいって、元は洞窟の中に置かれていた不動明王に出会い、奥の院としての三十六童子を巡拝するのが印象的であった。
  - ・聖なるものが、上へ上へと、奥へ奥へと求められ、その最内奥に不動明王があるという仕掛けが見事だった。
  - ・三十六童子を巡るのは、その奥に入って、包まれていることと考えられないだろうか。このような山の聖地に対して、海の聖地は、最初から包まれていると考えられる。
  - ・お堂のまわりに置かれた狸の置物が印象的であった。タヌキは元々吃怒鬼で、動物の狸とは関係なかったようだが、それがいつの間にか狸で覆われてしまっている。心や時代の重層性、また動物と癒しの関係も興味深い。奥にピュアに迫るといふのと正反対のような、上に重ねて、増やしていくという癒しの仕掛けもある。
  - ・狸の置物の数、お百度など、数の威

著作権者・所蔵者の権利の保護のため  
画像は掲載できません

力は興味深い。これについては、認知心理学的にも興味深い。

2. 第2回フィールドワークは、釘抜地蔵と呼ばれている、石像寺、千本ゑんま堂、船岡山を中心とした。
  - ・ここでの聖なるものは、この石像寺のあたりが風葬の地で、この世とあの世の境界と考えられていたことから、「境界」がキーワードと考えられる。
  - ・個々の寺社の検討も大切だが、この世とあの世の境界、鬼門など、京都におけるコスモロジーの大切さを考えさせられた。
  - ・それは同時に、京都の多層的であることを考えさせられる。
  - ・境界がキーワードとなるように、シャーマニズム的な要素が多分に感じられた。釘抜地蔵の元となる話は、痛みに耐えかねていた人が、両手にささっていた釘を抜いてもらうという夢を見て、痛みから解放されたことで、そこから痛みや悩みを

持つ人が、石像寺に願をかけにきて、成就した人のみが絵馬を飾ることになっている。これはイニシエーションの儀式とも考えられ、イニシエーションを受けた人だけが絵馬を飾れるのが印象的である。

・ここではまた癒しの厳しさと慈悲の両面が感じられた。たとえば願の成就した人だけが絵馬を飾れること、閻魔さんの厳しい表情などは厳しい面である。しかし閻魔さんの表情には慈悲の表れがあるように、慈悲の裏打ちがあるのが興味深い。

・ここでもおびたしい絵馬の数など、数の力は感じられた。

## 3. 伏見稲荷大社

・増殖型の聖地  
伏見稲荷では、塚も、鳥居も、どんどん増えていくのが特徴である。そこには、途方もないパワーが感じられるし、またそれを支え、それに逆に支えられている多くの人々の存在が感じられる。

・向こう側の神  
ご神体を見上げる形になっている場所が多いせいか、そこに神がいるのではなく、ご神体の向こう側を目指しているように感じられることが多かった。

このプロジェクトでは、個々の癒しのしかけを、それぞれの研究者が専門領域の知識を生かしつつ、ことばにしていくことで、癒しをより多面的に深く感じられるようにすること、またそれを伝えていくことを目標としている。またここでキーポイントに感じられた、眼力、数、などについて、基礎的研究にも取り組んでいきたい。

伏見稲荷大社…おびたしい数の鳥居が奉納されている

## 研究プロジェクト

## 青年期の社会的適応と文化

## 日本の若者の適応を考える

「最近の日本人の若者はコミュニケーション能力が下がってしまった」「不適応状態にある若者が増えている」ということを耳にすることがある。それは本当のことなのだろうか？ そして本当のことであれば、その背景にはどういった問題があるのだろうか。

こころの未来研究センターでは、平成20年度より青年期における「適応感」についての研究を行っている。

「社会的適応感」とはとても広い概念である。周りの人と楽しく過ごすこと、社会的に受け入れられること、健康で満ち足りた生活を過ごすこと、など、さまざまな状態を適応感に結びつくこととして捉えることができるだろう。このプロジェクトでは、適応感とは何か、そして逆に「不適応感」とは何か、ということをおよそ限定的に定義することなく、さまざまな世代や文化の比較を通じて明らかにすることを目指している。

青年期の人々のこころの問題は、これまで臨床心理学などの個別のアプローチや、社会学や教育学からのマクロのアプローチの双方から考えられてきたことが多かったが、まずはこころと社会のインタラクションを考えるとこころから、この問題に取り組んでいくことはできないだろうかと考えている。

## 関係性と適応感

私は学生時代から、文化心理学の

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)  
Yukiko Uchida

研究テーマとして、幸福感とは何か、ということについての検討を行ってきた。その中で明らかになってきたことは、日本文化の中に暮らす人の中では、幸福感は周囲の人と調和しているという感覚や、周りの人から「助けられている」という認識から得られる部分が多いということである。これは「自尊心を高めること」や「個人的達成を感じることを重視するアメリカの文化の中での幸福感とは異なっている。また、日本では個人的な幸福感をあまり強く感じすぎると周りの人とのバランスが悪くなるのではないかと懸念があることもわかる。つまり、他者から受け入れられ、しかも周囲とのバランスを崩さない、ということが精神的な安定感につながっているということになる。

また、不幸せな状態の時に人々がとりやすい「対処行動」として、アメリカでは怒りを感じてそれを外にぶつけるという「外的な行動化」がみられるが、日本では外的行動化はあまり多くはなく、むしろ自分を責めたり、負い目を感じたりすることから、自己をなんとか改善しようとする「悲しみの内在化」が見られることがわかった。他者を責めるのではなく、自分でいったんいろいろな不幸せの原因を受け止めていこうとするのもある種の関係志向性だが、その後の「自己改善」に向けての原動力の背景にも周囲からのサポートがあると考えられる。

## 価値観の揺らぎの中で

しかし、「日本人＝関係志向」と単純に言い切れなくなっていることも事実である。対人関係を重視し、周りとの調和を保とうとするのはなかなか一筋縄ではいかない。いろいろなおとこに注意を配分しなければならぬし、時には自分を押しさえなければならぬこともある。社会的な流動性がだんだん高まっていき、国際社会の中での競争力という概念が重視され、特にアメリカから個人の権利や自由という「個人主義」に関連する概念が入ってくるにつれ、「関係志向性」は大変なわりには個人で獲得できる物事が直接的には多くないように見え、ともすれば疑問が抱かれることもあるだろう。このような価値観の相克の中で、日本社会の中での「適応感」はどのように得られるのだろうか。

研究の手始めとして、平成19年12月、そして平成20年3月に、ワークショップを設けた。主に社会心理学・臨床心理学の国内外の研究者による話題提供を手がかりにして、若者の社会的不適応行動の特徴と、それらに対する教育的・治療的対応の現状、現代日本社会・文化の中にある価値観や行動規範との関連などをめぐって討議がなされた。そこで浮かび上がってきたキーワードは、社会の階層化、自己感覚からの離脱、ある種の「無感情」状態、コミュニケーションの不全である。人から助

けられている、という認識をもつとしても、それをキャッチするアンテナが閉じられてしまっている状態ともいえるだろう。

人とのつながりは「社会的資本」として捉えられることがある。人とのつながりをもつことによって、さまざまな情報が得られたり、困ったときに助けてもらえたりする。しかし人とのつながりは良いことばかりをもたらしてくれるわけではなく、煩わしさをもたらす可能性もあり、さらにはコネクションが何かを進めることの弊害になることもある。関係志向性が大切だ、というだけではなくなくなってしまった文化的価値観の中で、煩わしさなどの「負」の部分に、個人として、さらには社会としてどのように対応するか。日本社会の基盤となっていた「思いやり」や「相手の気持ちを察するコミュニケーション」の在り方を見直すことが1つの糸口になると考えて現在いくつかの実証研究を行っているところである。

## 比較から見えてくること

こころを考えていく上で、比較に

よる相対化は重要だと私は考えている。そのため、日本と他の国の、20代から40代までの世代の違う人たちや、「大学生」「就業者」「学生でも社会人でもない人たち」での比較も行っている。それぞれの人たちの対人関係の認知、個々人の感情のパターン(安定度)、幸福感、身体健康、对人的効能感などを測定し、現代日本の青年に現れている種々の問題を相対化し、原因解明へのアプローチを行っていきたくて考えている。

今年度の4月にデータ収集を始めたばかりのプロジェクトなので、具体的な結果報告は少し先のことになるが、いくつか見えてきたことがある。それは、大学生と社会人では、同じ20代でも傾向が異なっている、大学生のほうが社会人よりも個人主義的な傾向が強く、他者との関係性のある程度コントロールしたいと考えているということだ。しかし対人関係のコントロールは簡単にできることではないので、その中で傷つくことも多い。アメリカの学生がコントロールを求める傾向は日本の学生に比べるとかなり強いものだが、アメリカではコントロールが「実際にできている」という感

覚を各人がもつような社会的・構造的な仕組みがあるので、アメリカ人の学生は日本人の学生に比べるとコントロールできなかったとって傷つく可能性は低いようだ。どちらの仕組みが良いとか悪いという問題ではない。ただ、やはり社会の構造と個人の在り方は切り離して考えることが難しいことがよくわかる。

このプロジェクトを実現するために、こころの未来研究センターでは大規模な実験・調査参加者プールを作成し、国際共同研究に関わる海外の研究者の方々に一定期間滞在してもらおうということを行っている。大学生以外のデータの収集のためには、企業、NPO組織などのさまざまな学外の機関のご協力なしには進めることができないが、現在いくつかの機関の皆様へ快くご協力をいただいております。短時間で結果にたどり着けるものではないが、1つの研究として形にすることで感謝の気持ちを示していきたいと考えている。



平成20年3月に開催された第3回ワークショップ

初日に行われた公開ワークショップにおいては、『ひきこもりの国』(光文社、2007年)の著者である、ジャーナリストのマイケル・ジーレンジガー氏、文化心理学の第一人者で、日本の文化とこころの問題について多数の研究を行っているミシガン大学の北山忍氏、当研究センター教授で、近年の若者の自己と対人関係について詳しい、臨床心理学者の河合俊雄氏を講師とし、現代日本の若者のこころのあり方、とくに「ひきこもり」や、対人関係の問題、価値観の揺らぎなどをとりあげた。